慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白井さんと私
Sub Title	
Author	二宮, 孝顕(Ninomiya, Takaaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.360- 362
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0360

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

なく、帰国の望みも絶えた私の心は白井さんへの感謝に満たされるのであった。

感謝といえばまだある。

帰国後私は、佐藤朔さんや横部さんに温く迎えられて母校に帰る幸運を得るが、間もなく長いこと離れていた翻訳を再びやるようになった。しかし、出版界と遠ざかっている身には、たやすく本を出すのはむずかしい。

この時も白井さんは私の助けの神となった。

既に大使館に来た頃からJ＝ポウル・サルトルの「嘔吐」の邦訳を完成し、ジャーナリズムに顔が弘くなっていた白井さんは、私のまごついているのを見るとすぐ手を貸してくれた。

アラン＝フルニエの「ル・グラン・モーヌ」から最近のJ・ルナール（文庫本で、「にんじん」などはやがて十七版）に到るまで、白井さんの世話にならなかったものは一つもない。

二人で飲んだあるとき、私はしんみりその謝意を彼に述懐したことがあるが、相手は、戦争中私が大使館に紹介したことなどを先ず挙げて、私から謝辞をうける筋合いは一つもない、と言う。

近頃何とも爽かな人柄ではないか。

（本塾大学名誉教授）

白井さんと私

二宮孝顕

このたび白井さんが定年を迎えられるに当り仏文科の歩みをかえりみる時、長年にわたって中心人物として活躍され、多くの人材を育てられた功績にあらためて敬意を表したい。

白井さんに初めて会ったのはいつだったかはっきり覚えていないが、高橋広江先生に紹介された。その頃白井さんは大学を出たばかりで、フランス大使館に勤務されていたように思う。私の方はNHKの海外放送に従事し、昼間は時間の余裕があるので日吉の予科でフランス語を教えていた。高橋先生とはパリで一緒だったので親

しくなり、先生の教え子に白井浩司という秀才がいることはかねて耳にしていた。会ってみると、長身で、色白の細面に、黒縁の眼鏡をかけた温厚な青年学徒であった。今から四十年も前のことである。NHK国際局では、私の後任としてはいられたので一緒ではなかったが、終戦後、三ノ橋時代の予科で同僚の教員になる。当時、戦災で校舎不足のため焼け残りの建物を借用していたが、困窮の中で苦労をともにした先生にも学生にも、今日では考えられぬような心のふれ合いがあった。

やがて新制大学に変り、白井さんは文学部、私は法学部の所属になった。お互に会う機会は少なくなったが、白井さんの研究活動はめざましく、数多くの論文や翻訳を発表し、学会でも次第に大きな存在になった。とかく引っ込み思案の私などにも気を配り、機会ある毎に陽の当る方へ引き出してくださった数々のご好意は忘れられない。

後輩への世話は言うに及ばず、先輩への心づかいも細やか人である。私の友人で、亡くなった作家の丸岡明君は、暁星、仏文を通じて白井さんの先輩であるが、たびたび彼の会の司会を引き受けていた。還暦の祝いが梅若能楽院で催された時、いったん退院はしたものの、この先の健康状態が危ぶまれ、自他ともにそれを感じているような雰囲気であったが、白井さんは軽妙な司会をし、丸岡君に赤いベレー帽をかぶせて皆を笑わせた。

また、白井さんも私も、女子高等学校の校長という役職についたことがあり、ここでも共通のおつき合いがある。女子高創立二十周年の時は白井さんが校長であったし、先年三十周年記念の際は同じ仏文の若林校長のもとで式典が行われ、佐藤元塾長、白井さんと私が元校長として臨席した。どういうわけか女子高と仏文は縁があり、女子高出身者で塾のフランス語専任教員になっている人もある。

定年後白井さんがどうされるのか全く知らないが、少なくとも肩の荷が軽くなり、自由な時間が多くなるのではないだろうか。健康で若々しいし、これからも益々よく飲み、研究を続け、いっそう活躍されることを期待し

ている。（一九八二・七）

先生にはじめてお会いした頃

遠藤周作
（本塾大学名誉教授）

「君たちの先輩に白井浩司君という優秀な人がいる。」と私たちは仏文科の時、当時講師だった佐藤朔先生に時々、そうきかされていた。

昭和二十年—終戦直後の三田は図書館も大講堂も焼け残った校舎の三分の一まで進駐軍に占拠されている状態だった。しかしふたゝび勉強できるという悦びで仏文科に進学した私は、講義に出てみて真実がっかりした。楽しみにしていた佐藤朔講師が休講である。あとのI教授、G講師の子供だましのような授業のなんと詰らなかったことよ。

二年目にやっと待望の佐藤先生のジイド論がはじまった。そしてその頃一年後だったろうか私は佐藤先生がN・H・Kに奉職されていた白井浩司氏をたずねられた折偶然お供をしたことがある。それが白井先生にお目にかゝった最初だったろう。

「白井君に仏文科に来てもらおうと思ってね」

帰りみち佐藤先生がおっしゃった。私はもちろん、サルトルの「嘔吐」の訳者である白井浩司氏の名前を知っていた。

「いつ、いらっしゃるんですか」

胸をときめかせてたずねた。白井浩司氏のサルトル講義がはじまれば、ジイド論以外、出席する気にもなれない仏文科がどんなに楽しくなるだろう。

「残念ながら君が卒業してからだね。」

がっかりしたのは私だけではなかった。十人ほどしかいなかった仏文科の学生がみな同じ気持でそれなら白井さんにきて頂き我々だけでサルトルを読んで頂だこうという気持になった。そして御承諾をえて「自由への道」を教えて頂くことがきまった。

原書が入手困難な時代だったから、私たちは白井さん